
領域名：基礎看護

報告者：山川和歌子

教育及び実践の課題

COVID-19 の影響により、演習や実習、学生同士のつながりの機会が減り、学生からは「期待が外れた」「もっと実習ができると思っていた」「これが看護学生なのか」という声が聞かれた。教員は COVID-19 の影響下でもそれなりに看護学生として学び取ってほしいと考え学習を提供していたが、学生が思い描いたものとのギャップが生じていると思われる。

また、COVID-19 の以前より、臨床現場と大学で教えていることのギャップも生じており、看護師が何をやる職業なのか揺らいでしまう学生もいる。

様々な要因により学生から看護職への移行には困難が生じるが、学生が専門職者として成長するために、教員がどのように関わればよいか検討したいと考え文献を選択した。

活用した論文の概要

グラウンデッド・セオリーの手法を用い、看護大学生の看護教育課程での経験を記述し、その過程を明らかにする研究である。大学に適応した看護大学生の教育経験の基本的な社会心理プロセスは「バランスを模索し、専門職としてのアイデンティティを成長させながらサポートネットワークを活用する」であり、コアカテゴリーは【予想外の要望】であった。バランスを模索している学生は【予想外の要望】を感じ、「自信喪失」や「自信」、「自己犠牲」、「厳しさ」、「関連性」の困難を乗り越え、「先入観の放棄」を行い、「看護の風土への順応」に至ることで、看護職者としてのアイデンティティを成長させていた。

教育及び実践への活用

教員は、学生自身がスケジュールを見通せるように、科目のスケジュールや課題の提出期限などを事前に一覧にして伝えるようにしている。一部の学生は、そのスケジュールを活用して、他の科目との自己学習のバランスを模索している様子であった。

また、講義や演習の中で、臨床がイメージできるような取り組みも行っている。例えば、臨床現場で使用頻度が多くなっている物品（閉鎖式輸液回路システムなど）を授業で取り上げることや、模擬電子カルテを活用して演習を行うことを行っている。臨床をイメージしやすくなることで、その後の実習や就職後における「自信喪失」が軽減されると考えている。今後は、学生が自ら専門職者としてアイデンティティを成長させられるように、学生が「自信」をつけられるような教員の関わりや、学生同士でサポートネットワークを構築できるような支援を行っていきたい。

参考文献

Goodolf M.D. Growing a Professional Identity: A Grounded Theory of Baccalaureate Nursing Students. Journal of Nursing Education, 2018;57(12):705-711

領域名：精神保健看護

報告者：望月 花

教育及び実践の課題

3年次の講義・演習において、精神疾患の急性期にある患者は自我が脆弱であったり思考が混乱していたりするため、自らの行動の理由を説明することが困難になること、およびこの時期に構築する信頼関係は、その後の関係性やリカバリーにも影響することを伝えている。しかし、患者、学生双方を守る観点から、急性期患者を学生に担当させることはなく、講義・演習での急性期看護の学びを実習で体験的に確認してもらうことは十分にできていなかった。

活用した論文の概要

人は本来、周囲から受入れられ尊重されたいという思い (Personhood) をもっており、この思いを支援することがリカバリーに重要である。精神科急性期病棟において、Personhoodが安心 (safety) の経験と認識に及ぼす影響について明らかにすることを目的に、急性期病棟入院経験者へ半構造化面接を実施した。その結果、対等に接する、尊重する、選択できる環境を作るといった看護師の関わりが患者の Personhood への支援となること、それによって患者は安心 (safety) を認識することを報告している。

教育及び実践への活用

講義では、まず上記3つの関わりを事例を挙げて紹介したうえで、看護師が治療の入り口である急性期に、安心できる関わりを患者に提供することによって培う信頼関係が、その後の治療関係やリカバリーに影響することを伝えた。学生は、急性期、回復期などの病期によって関わり方が違うことや、個人として向き合っただけで患者に関わる必要性を学んでいた。

演習では、急性期における対応を学ぶ際に看護師の立場だけでなく患者の立場でも考えて話し合ってもらい、その後3つの関わりを再度提示した。学生は、最初は患者の幻覚妄想や易怒的な行動を怖がっていたが、患者自身も幻覚妄想により自我が脅かされ怖い思いをしていることに気づき、患者に、自分が尊重されていると感じてもらうためには、看護師は患者の立場になって考えることが必要であると学んでいた。

実習では、看護師に急性期の患者-看護師関係の構築が、その後の治療関係、リカバリーへ影響したと思われる体験を語ってもらうことを計画したが、Covid-19流行によって実習期間が短縮されたため実施できなかった。講義・演習では学びを積み上げることができたが、実習でより体験的に確認してもらうことは今後の課題である。

参考文献

Cutler N. A., Sim J., Halcomb E., Stephens M., Moxham L. Understanding how personhood impacts consumers' feelings of safety in acute mental health units: a qualitative study. *International Journal of Mental Health Nursing* 2020;30(2):479-486

領域名：地域保健看護

報告者：伊波良剛・知念真樹

教育及び実践の課題

地域保健看護実習では、本論文にある「保健師の基盤の9項目」を意識して取り組んできた。とくに、「住民や関係機関との信頼関係の構築」、「自己啓発での学び」、「ケース支援などでの倫理的判断」は、実習課題として認識してきた。コロナ禍での遠隔教育や学内実習では、学生は事前学習と実習記録に伴う睡眠不足に陥りやすく、健康管理が後回しになっていた。

活用した論文の概要

わが国の自治体で3年以上勤務している保健師586人の分析データから、包括的なキャリア発達尺度(32項目)が開発された。本尺度の信頼性・妥当性は探索的な因子分析と確認的因子分析により、信頼性はクロンバック α 係数により示された。測定項目は、「地域活動・政策・マネジメント」(第1因子)、「保健師のアイデンティティ」(第2因子)および「保健師としての基盤」(第3因子)である。各因子の具体的な項目として、第1因子は「私は、地域保健の資源や組織を開発、構築することができる」「私は、地域ケアの質をモニタリングすることができる」等14項目。第2因子は「私は、保健師としての仕事に価値があると感じる」「私は、保健師としての職務を全うしたい」等9項目。第3因子は「私は、地域住民や関係機関との信頼関係を築くことができる」「私は、自己啓発で学ぶことができる」「私は、ケース支援や保健活動で倫理的判断ができる」等9項目であった。包括的なキャリア発達尺度の各項目は、5段階のリッカート尺度で測定されていた。

教育及び実践への活用

本尺度の「保健師としての基盤」は、保健師教育でも力を入れたい内容であり、現在の課題にも当てはまる。特に、「住民や関係機関との信頼構築」「自己啓発で学ぶことができる」「自分の身体的・精神的健康を管理できる」および「ケース支援や保健活動で倫理的判断ができる」は、4年次実習を通して強化できないか、現在も模索中である。卒業後の自己啓発力につながるよう、新カリキュラムの4年次の地域保健看護実習Ⅰ・Ⅱで、教員や実習先に関係なく、全学生が自主的に学びを深めるような実習展開を計画している。具体的には、「地域把握シート・アセスメント」や「保健事業の実施・計画・評価」の様式などを用い、自発的に調べてまとめた部分の確認とディスカッションの時間を実習スケジュールに組み込む準備を進めているところである。

参考文献

Saeki K., Hirano M., Honda H., Asahara K. Developing a comprehensive career development scale for public health nurses. *Japan Public Health Nursing*, 2019;7(1):135-143

領域名：母性保健看護・助産

報告者：下中 壽美

教育及び実践の課題

近年、周産期における妊産婦の自殺予防や虐待予防の観点から周産期のメンタルヘルスケアは重視されている。学部教育では、助産師教育の中で周産期メンタルヘルス関連の講義を1コマ入れているが、看護師教育では産後うつ病などを産褥の異常で触れるのみであり、詳細な部分は伝えていない。臨床現場でメンタルヘルスニーズを持つ妊産婦は増えてきており、教育の必要性やニーズはあるが、基礎教育の中で十分に教育できているとは言えず課題であった。

活用した論文の概要

助産師の周産期メンタルヘルスケア能力を向上させるために、研究者らは大学内でモジュールを開発し、提供した。このモジュールは、メンタルヘルスの問題について女性と関わる際の知識、スキル、および態度を向上させることを目的としていた。モジュールの評価のために事前事後試験が計画された。対象者は、アイルランドでダイレクトエントリー助産学位プログラムを受講している学生である。事前調査には28名、事後調査には26名が回答し、前後の対応のあるデータは25組であった。対応のあるt検定の結果、モジュール受講後、受講生の知識と技術は有意に向上していた。受講生からのコメントでもモジュールの評価は高かった。

教育及び実践への活用

令和5年度の学生への講義より本論文のモジュールで重点をおいていたエッセンスを学生に伝えている。具体的には、①周産期のメンタルヘルスに関する女性とそのパートナーの教育、②周産期のメンタルヘルスの問題を発症するリスクが高い女性を早期に特定すること、③女性が母親になることについての心配や懸念（過去のメンタルヘルスの問題を含む）について話し合う機会を提供すること、④女性を母親として肯定する、⑤女性に出産経験について話す機会を提供する、⑥セルフケア戦略やサポートグループに関する情報など実践的な支援と情報を提供する、⑦産後の睡眠と休養の機会を提供することなどが、女性のメンタルヘルスへ肯定的な影響を与えることを講義のスライドに含めて学生へ伝えている。助産学生へは特に⑤について、バースレビューの意義の中でも母親のメンタルヘルスへ肯定的な影響を与えることも強調した。看護学生へは産後にメンタルヘルスの問題が生じやすいことと合わせて女性のメンタルヘルスへ肯定的な影響を与えることを伝えた。11月から始まる看護学生の演習・実習を通して、講義の学びを実習現場で結び付けられるようにしたい。

参考文献

Higgins A., Carroll M., Sharek D. Impact of perinatal mental health education on student midwives' knowledge, skills and attitudes: A pre/post evaluation of a module of study. Nurse Education Today, 2016;36:364-369

領域名：小児保健看護

報告者：上原和代

教育及び実践の課題

本学の現行カリキュラム（2011～2021 年度入学生）では 3 段階実習（3 年次後期～4 年次前期）の 6 科目において演習 1 単位（15 回/連日）に引き続き実習 2 単位（10 日間連日）という各科目の演習・実習が連動したカリキュラムが導入された。演習を臨床実習の準備学習として効果的に運営するようカリキュラム導入の際、科目の責任教員向けに外部講師を招いてシミュレーション学習のトレーニングが実施された。各科目ではこの 10 年間、シミュレーション学習、模擬患者へのロールプレイ学習、ジグソー法を取り入れた看護過程、個人学習ノートの一部をグループ学習へ変更するなど、学生間の学習活動を活性化する試みがなされた。

活用した論文の概要

インタラクティブなゲームベースの学習体験の効果を測るために、従来のスライドを用いた講義形式の学習から、事例を用いた学習者主体のシミュレーション学習へ変更した。事例は高血圧、2 型糖尿病の基礎疾患があり、COPD 増悪による入院 3 日目の 50 代男性患者から夜 9 時にナースコールで呼ばれるという設定で、いくつかの課題をチームで解決しながら、病室から脱出するまでのタイムを競う内容であった。学習活動の参加者は、看護歴 18 か月未満の看護師 167 名と 18 か月以上の看護師 46 名で、学習後に自記式質問紙で学習効果を測定した。その結果、ゲームシナリオ学習では参加者の満足度が高く、看護の知識と実践が改善されたこと、正確なスキル提供への自信が高まったこと、経験豊富な看護師においてより効果が高かったことが報告された。その際、グループで協力した、楽しかったという自由意見が多かった。

教育及び実践への活用

現行カリキュラム導入以降、小児保健看護演習でもシミュレーション学習を継続して提供している。初期のシナリオは臨床実習で学生が躓きやすい場面を材料に、子どもへのあいさつ、症状アセスメントと対応、事故予防の短いシナリオであった。その後、ネフローゼ症候群の幼児とのコミュニケーション、胃腸炎の乳児のフィジカルアセスメント、川崎病の学童への急変対応の 3 種類を経て、現在は看護過程 1 事例に絞り、看護過程と連動させたシナリオシミュレーションへ展開することで、いわゆる頭作りとベッドサイドパフォーマンスの両方が学べるよう修正を重ねている。シミュレーション学習をファシリテートする際に教員が心がけていることは、評価しない、実施者の緊張緩和に努める（2 人実施など）、チームの一体感を高める（作戦タイム、観察役の学生が自由にヒントを出して応援するなど）である。今回の文献から「ゲーム感覚で楽しく」という要素が学習者の主体性と満足度を高めることをふまえ、学習者から笑顔や笑いが自然と起こるような仕掛けを加えて、小児看護の面白さを伝えたいと思う。

参考文献

Adams V., Burger S., Crawford K., Setter R. Can You Escape? Creating an Escape Room to Facilitate Active Learning, *Journal for Nurses in Professional Development*, 2018;34(2):E1-E5

領域名：成人保健看護

報告者：源河 朝治

教育及び実践の課題

本学では、多くの領域において臨地実習の直前に演習科目が配置されている。実習では、基礎的な知識を応用することが求められるため、実習の前段階である演習では多くの場面で反転学習法が用いられている。反転学習は、基礎的な知識を習得した上での参加が求められることから、演習に先立ち、基礎的な知識を確認するための事前課題を課していることが多い。しかし、成人保健看護領域では、事前課題に関する評価を臨地実習時の状況や学生の意見に基づいて行っているものの、研究成果に基づいて検討することはできていない。今回取り上げた論文にもあるように、事前課題は反転授業の成果に大きな影響を与えるため、内容の検討は重要である。

活用した論文の概要

今回活用した論文は、反転授業に用いられている事前課題についての文献レビューである。著者の Han ら(2019)は、事前課題のベストプラクティスを明らかにするために、医歯薬看護系の大学生・大学院生を対象にした文献 48 件を分析した。その結果、教科書の通読やビデオ講義といったよく使用されている事前課題の内容が明らかになった。また、事前課題に対する学生らの評価を踏まえ、事前課題におけるベストプラクティス 8 項目を提示した。この 8 項目には、「過剰な授業や二重講義を避ける」、「事前課題の具体的な指示やガイドを提供する」、「生徒が課題に必要な時間を意識する」、「授業前の課題に関する学習内容が理解できたかを学生自身に評価させる」、「事前課題をタイムリーに提供する」といった項目が挙げられていた。

教育及び実践への活用

ディスカッションを踏まえ、成人保健看護領域が担当している演習科目において課している事前課題の内容を、ベストプラクティスとして示された 8 項目にそって検討した。

その結果、まずは、演習や実習に影響がない程度に事前課題の量を見直した。また、課題に関する説明文も誤解を招かない表現に改めた。さらに、クリティカル・緩和ケア演習では、学生自身が学習成果を評価する事前課題を取り入れた。具体的には、一次救命処置の事前課題として、学生自身が行った胸部圧迫を視覚的に評価するシステムを導入し、自身の技術を客観的に評価できるように課題を設定した。事前課題を通して、学生からは「自身の技術を自らが評価できる機会を得ることで学習への意欲向上や自信の獲得につながった」との発言が聞かれた。

なお、学生への聞き取りから、事前課題に対する学生の負担は他の科目の課題も影響していることが明らかになった。今後、事前課題の在り方について領域横断的な検討が必要である。

事前課題の内容は、演習や実習に直接的に影響するだけでなく、学生の自由な学習時間の質の担保にも繋がる。引き続き事前課題と演習・実習との有機的連携を目指していきたい。

参考文献

Han E., Klein C.K. Pre-Class Learning Methods for Flipped Classrooms. American Journal of Pharmaceutical Education, 2019;83(1):40-49

領域名：老年保健看護

報告者：大城 風佳

教育及び実践の課題

老年期は、引退や重要他者との死別、療養による生活の場の移動などのライフイベントから社会関係の喪失及び縮小が指摘されている。その中で高齢者は社会関係を喪失しながらも、新たな社会関係を形成できる強みがある。老年保健看護の講義、実習では、高齢者の社会関係そのものを強みと捉え重視している。しかし、社会の与えるシステムの中で社会関係を形成することが中心となる学生の世代にとって、高齢者の社会関係を形成するプロセスはイメージしづらく、強みとして捉えにくいことが課題である。

活用した論文の概要

この論文は、高齢者の社会的排除に関する文献のクリティカルレビューにより、高齢者の社会的排除の概念モデルを提案している。モデルは Bronfenbrenner の人間生態学的枠組み（クロノシステム）の概念を取り入れ、個人のリスク因子・社会関係・心理社会的資源と社会情勢のプロセス・遠位成果という4つの柱が双方向に影響し、好循環にも負の循環にもなりうるという関係性を示した。また、時間の経過と共に社会の文化的・構造的・環境的な文脈の影響があること、遠位成果間の関連性として帰属意識と孤独感の相互関係のように排除を強化しうる性質があることの可能性を示唆している。新しい視点として、高齢者の望むまたは必要とする社会関係と達成した社会関係を評価・査定することをモデルの中心に位置づけ、遠位成果への道筋に不可欠な構成要素として強調している。

教育及び実践への活用

老年保健看護Ⅰでは、高齢者が身体的、精神的、社会的影響をうけながら社会関係を喪失する中で、新たな社会関係を形成する様について、領域の研究成果を具体例として用いて解説している。老年保健看護Ⅱでは、就労支援、社会貢献への支援の研究成果を用いて紹介している。今回、高齢者の社会的排除の概念モデルにより、これらの支援が参加を目標として位置付けるだけでなく、高齢者自身の望む、あるいは高齢者自身が必要と考える社会関係と現実の社会関係のギャップを埋める支援としても位置付けられ、心理社会的資源・社会情勢プロセスへのアプローチとしても着目する必要性を強調した。これらの視点を用いて、看護卒業論文・看護統合演習のテーマ選定では、社会参加だけでなく、本人の望む社会関係を形成する手段として活動を位置付けることを取り入れた。その結果、活動のための外出支援ではなく、本人の望む社会関係に参加するための支援をすることで遠位成果が得られることが複数事例で報告された。

参考文献

Burholt V., Winter B., Aartsen M. A critical review and development of a conceptual model of exclusion from social relations for older people. *European Journal of Aging*, 2020;17:3-19

領域名：教養科目・専門関連科目

報告者：金城芳秀

教育及び実践の課題

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックに伴い、教員の多くは従来の対面教育に代って遠隔で授業を運用した。学生はオンライン講義あるいはオンデマンドでの学習に取り組まざるを得なくなり、孤独と不安に耐えながら、学内対面授業の再開を待っていた。これまでとは異なり、インシビリティ (incivility) がみえやすい学業体験といえそうである。レジリエンス (resilience) は、忍耐力 perseverance、自立 self-reliance、意味 meaning、平静 equanimity および実存的孤独 existential aloneness によって特徴づけられているが、ストレスやインシビリティと、どのような関係にあるのだろうか。

活用した論文の概要

Smith et al (2022) は、2020 年 9 月より 5 週間、米国南西部州の看護学部学生 (3,540 人) を対象に断面研究としてオンライン調査を実施した (回収率 19%)。欠損値 (185 人) を除く 490 人を分析対象にした順序回帰分析から、ストレス (10 項目; PSS10, Cohen et al, 1983) とインシビリティ (15 項目; INE-R, Clark et al, 2015) との間には正の相関関係が、レジリエンス (14 項目; RS-14, Wagnild & Young, 1993) とインシビリティの間には負の相関関係が得られた。新しい知見として、レジリエンスが高いとインシビリティの頻度やストレスの影響を抑える防御的な効果が示唆されたが、高ストレスグループに限定すると、レジリエンスの防御効果は示されなかった。

教育及び実践への活用

看護教育においては、シミュレーション、認知的リハーサル (cognitive rehearsal)、安全医療推進 (Team STEPPS) などはレジリエンスを育む学習機会としての重要性が指摘されている。コロナ禍の収束が曖昧な状況ながら、本学では計画的に新カリキュラムを導入した。新旧カリキュラムの同時進行に伴う多用さと心理的負荷は避けられないが、いまのところ、学生も教員も、差別的／侮辱的な発言、通信に応答なし、不適切なメールなど、重大なインシビリティは起きていないようである。データに基づかない推測であるが、われわれに備わっているレジリエンスはここ数年の通常ではない学業経験のストレスを防御できたのかもしれない。シビリティな相互関係の構築はあらゆる活動の基盤であるが、レポートの作成等に生成 AI が不正利用されれば容認できない状況も生じるであろう。今後、新たなパンデミックのような脅威に曝されても、学問的誠実性 (academic integrity) に価値を置く教育学習環境を達成・維持する必要がある。

参考文献

Smith J.G., Urban R.W. Wilson S.T. Association of stress, resilience, and nursing student incivility during COVID - 19. Nursing Forum, 2022;57:374-81
